

“この人に学ぶ”

第4回 吉田松陰



全管連 技術参与 小泉智和



松陰像（国立国会図書館蔵）

吉田^{よしだ}松陰^{しょういん}は、長い武家政治を終わらせ、近代国家日本の夜明けを迎えるにあたって多くの有能な人材を育てた教育者、思想家でありました。

彼は、当時、諸藩を巡り外圧に対する危機のなさを痛感、そしてそれを束ねる幕府が外夷、外国に軽蔑されているにも拘らずの体たらくに対し、激しく糾弾する憂国の士でした。

彼が開いた^{しょうかそんじゅく}松下村塾では、尊王攘夷を掲げ京都で兵を挙げた久坂玄随、武士だけに頼らない奇兵隊を創設した高杉晋作、初代首相伊藤博文、第3代首相山縣有朋などといった多くの有能な士を輩出しました。

今日、彼が開いた松下村塾は、「明治日本の産業革命遺産」として、世界遺産登録されています。

○松陰の名言

松陰は、20歳の頃から見聞を広めるため、情報収集のために全国遊歴の旅に出ます。

多くの人に会い、国事を議論しています。それだけに多くの発言が名言として残されています。また、教育者としても大変多くの言葉を残しています。そのいくつかを紹介しましょう。

- 一つ善いことをすれば その善は自分のものとなる
- 一つ有益なものを得れば それは自分のものとなる
- 一日努力すれば 一日の効果が得られる
- 一年努力すれば 一年の効果がある
- 大事なことを任された者は 才能を頼みとするようでは駄目である
- 知識を頼みとするようでも駄目である
- 必ず志を立てて
- やる気を出し努力することによって

上手くいくのである

- ・人生は 志の高さ次第だ
- ・大器をつくるには いそぐべからずと
- ・みだりに人の師となるべからず みだりに人を師とすべからず
- ・夢なき者に理想なし 理想なき者に計画なし 計画なき者に実行なし、実行なき者に成功なし 故に夢なき者に成功なし
- ・自分の価値観で人を責めない 一つの失敗で全てを否定しない
長所を見て短所を見ない 心を見て結果を見ない
- ・かくすれば かくなるものと知りながら やむにやまれぬ大和魂
(萩から江戸へ檻送される途中、高輪泉岳寺〈47士の墓〉前で詠んだとされる句)
- ・身はたとひ 武蔵の野辺に 朽ちぬとも 留め置かまし 大和魂(辞世の句)

○松陰の生涯

文政13年(1830)、長州萩城下松本村(山口県萩市)で長州藩士杉百合助の次男として生まれました(幼名虎之助、後寅次郎)。

天保5年(1834)、叔父の山鹿流兵学師範吉田大助の養子となり、翌年叔父が病死したため家督を相続しました。その後、叔父玉本文之進の開いた松下村塾で

指導を受けます。

19歳、藩命で須佐、大津、豊浦、赤間関などの海岸防備を踏査します。

20歳から*飛耳長目ひじちようもくの旅に出ます。

*松陰は塾生に対し、飛耳長目「常に情報を収集し、判断材料にせよ」と説いています。その①21歳、九州遊学。②22歳、江戸にて佐久間象山に学ぶ、通行手形を持たず東北遊歴。萩にて謹慎、“松陰”と号す。

23歳、③水戸を經由して東北諸国を遊歴、④浦賀にて黒船を見る、⑤ロシアへの密航を企て長崎へ向かうが果たせず。

24歳、⑥金子重之輔と米艦ポーハタン号への乗り込みを企てるも失敗→下田奉行所に自首→萩の野山獄へ檻送されました。

25歳、野山獄にて囚人相手に論語などを講義→杉家で塾居。26歳、教授を開始

27歳、杉家の邸内に塾舎を開きます(叔父の松下村塾の名を引き継ぐ)。

28歳、家学教授のための門人引見を許されます。幕府老中間部詮勝まなべあきかつ襲撃計画により、野山獄に再び投獄されました。

安政6年(1859)*安政の大獄 29歳、江戸へ護送され→伝馬町の獄舎で斬首→小塚原回向院えこういんに葬られました。

文久3年(1863)、松陰の遺骨は、門下生たちにより、世田谷に改葬されました。



松下村塾（萩市観光協会ホームページ）

○松陰が目指した日本の将来

松陰による松下村塾が開かれたのは、野山獄を出され江戸へ檻送されるまでの2年程。

このわずかの期間に、武士に限らない*草莽^{そうもう}の志士が集まり、そして時代を動かす多くの逸材が輩出されるようになりました。

*安政の大獄で収監される直前、書状の中で「今の幕府も諸侯も最早粹人なれば扶持の術なし。草莽^{そうもうくつき}崛起の人を望む外頼みなし」と記し、“在野の人よ立ち上がれ”と訴えています。

彼は、一方的に弟子に教えるのではなく、一緒に考え意見をかわすことをしました。

学問への疑問を持たせ、藩・日本の将来について考えさせ、それを解き明かすのは自らの力でしかないとし、目を広く外に向けさせるように指導したのです。

そして、祖国日本の危機を救うのは、世界の事情を知ることであると論じたのです。

彼の思想は、これまで続いた幕府・武家政権を否定する「一君万民論」で、「天下は万民の天下にあらず、天下は一人の天下なり」とし、天皇の下に万民は平等になると主張したのです。また、欧米の列強・帝国主義に対して、日本も朝鮮・満州・台湾・フィリピン・カムチャッカといった領土を領有しなければならないと主張しました。

そして、弟子たちには忠誠をもって藩に仕えれば理想の国家ができるという信念を持たせたのでした。

これらの思想は、明治以降の大日本帝国主義、更には今次大戦の特攻隊、戦後の三島由紀夫の憂国思想、報国思想へと受け継がれるところにもなりました。

松陰が没し明治から150年、改めて今の時代に求められるのは、時代を見据えて的確な発想ができること、信念と志をもって行動に移すことであると思います。

コロナ惨禍を前にして、企業には変革の発想、負けない行動力が求められています。

○松陰ゆかりの地巡り

松陰の生誕地萩には、野山獄や松下村塾、萩城などがありますが、終焉の地江戸（東京）にも伝馬町牢屋式跡や松陰が眠る松陰神社などがあります。

ここでは、筆者がご紹介できる松陰ゆ

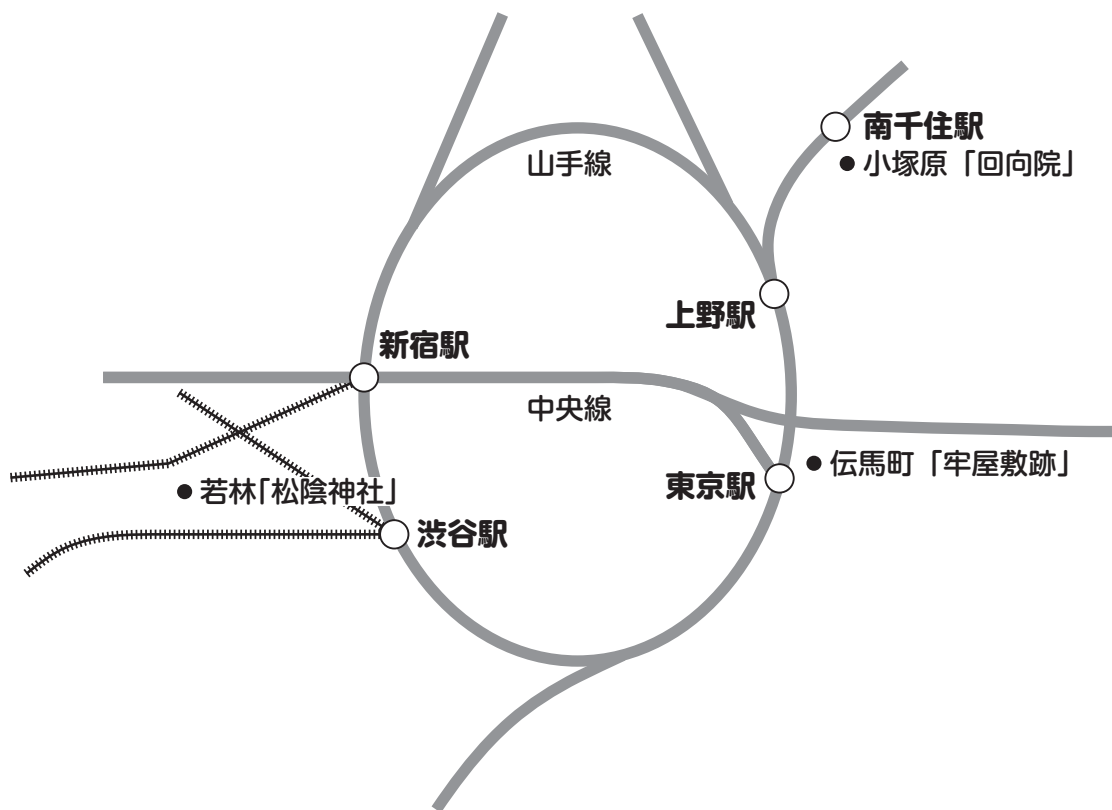
かりの地をご案内します。

伝馬町牢屋敷跡（日本橋小伝馬町：十思公園）は、萩から江戸に送られ留置され、斬首されたところです。

小塚原回向院（南千住）に最初埋葬されますが、その後高杉晋作や伊藤博文など松下村塾の門下生たちによって掘り出され、世田谷区若林の地に改葬されました。その墓所には松陰の御霊を祀る「松陰神社」が築かれています。



松陰神社（東京都神社庁ホームページ）



管工事組合の皆さん、その家族の方が東京へ来られたら、小泉がご案内します。

申し込み：全管連事務局 所要：1か所1～2時間 無料

*参考資料

「図説「吉田松陰」」 木村幸比古著
河出書房新社

「吉田松陰が復活する」 宮崎正弘著

並木書房

次号では、渋沢栄一をご紹介します。